

寛永諸家譜

清和源氏丁九世之內
賴光流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (24)
函號 圖 76 1



Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM Kodak



波野

寛永諸家系圖傳

清和源成

賴光流

淡野

丁二

安芸守光景松平の称号とりらゆ

國房

賴光

賴國

光國



光信

光基

光衡

光行

土岐

實朝の時清野判友をもと

光時

清野 次郎

六条院判友代

檢地連役

左清門尉

光清

清野 右郎

光脣

次郎

光縕

右清門尉

光榮
光忠
次郎
影智
山法師
重光
五郎
有光
彦六
光保
孫次郎

國威

又三郎

良威

大貳房 山清郎

東隆

夷三郎

け乃數代中總

光仲

三河五郎二三

光朝

濱野八郎

光純

濱野九郎

正智

えり

捨律師

やさ

黙意

れい

上座

やさ

山法師

長勝

なが

生國尾別

きずくい

織田信玄のら死たり長勝が文安井

きずくい

おもてと親絆あり安井も又源氏
なり長勝男子を生ふ二人のじよめ
を養ひて一女ハ萬吉ト嫁一女ハ長
改ノノ嫁モ長改ら矣ト生むると云
て源氏安井とはゆくら前となりて後
信玄の命からり萬吉小属ト

長政

なが

初名ハ源三郎

げんのな

長勝はもへやりげても改をもるの氣
こなまほ秀吉もんづけの大將た
アリ時信玄のおはせからて長政
秀吉小属 楠列 橋列 銀馬因幡伯
齋として数年の合戦より軍功あらば
秀吉幕下のを昌せたり幼少
の時秀吉を改この間くも勝が都下
到るソノ秀吉と先主の絶と
なま

秀吉天下一統の時長政京都の秀吉
代となり河内大津の城を以て又
坂本の城を以て河内改易と
天正十二年秀吉和泉紀伊と近畿の
の藩主となりつゝも
同十三年秀吉和泉紀伊と近畿の
田舎を改命とすけたまゝしてもとほり
と又秀吉守秀長孫吉郎秀治と大

將來にて國をたづけし

同十四年

東照大権院ニ秀吉ニ和賀の子モ長政
ひきしもとてを引演奉り
秀吉の妹と演妻の嫁ア嫁ヤリめ
たま、毛うり

大権院モ改ニテノリトモトマツルく
たま、

同十五年秀吉二十万石トシテノル

宗モ近畿の二キモ改命トシケタマ
ソリテ軍事トモソリエリ
大ソリケシヨリ、時ノ形役の主
ミオキシヨリ一揆をおこねモ改
命して山元を納命にモソリメ
制法教テ象とモ秀吉形役の主
を修ム内益即成改ムトシモ、もと
國中の可成成改ムカキモソリモと
シテ亂と起シテモ秀吉成改

なれば國中のそよひとて
討伐せしめたまふ小成改制はと
もしくや長改へ金下て成改と自
教やうちを改形後へ下仰て是
民を大くあらざるはあきらめり而
後のまことか藤清は小あむもあ人小
たまふ

同十六年清主佑下に叙一彈正少弼
ノ仕事

同十七年幕府の主と終をあむま
年や東洋を征伐へたまんにて政
政ごとのことをそぞりたまふ

同十八年正月

右法院敵はと済をトメてあむり
は討伐のありてその日を改めゆき渡
済あこまよよさは賤と敵と

同年三月朔日あむれ衆を征伐のた
ちを發り日と經

大權現の強河の城（アラカワノシタ）たりたま、時

石田源雅（イシダヨウヤ）の陣三成慶（ミツノリキ）と、もくた

太刀（タケ）と、城（シタ）り、たまつんすと、船せ
そと改毛（ハラフ）を、いきめてもかく城（シタ）い

ら、一じり川（カワ）とも

大權現秀吉（アラカワヒデヨシ）の店（ミヤニ）り、この

たび

大權現法軍勢（アラカワガクジンセイ）を、そんごとく、はる
鷦鷯（チドリ）と、ほり、りて、馬太川（マタカワ）より、舟橋を

けさせら（セラ）す、石田又兵（イシダユウボウ）と、うり、去

政活勞（シキラウ）と、そら、舟橋を、そり、往

ひと、むり、くは、す、り、り、げ、く、れ、秀吉
大い、む、ひ、ひ、た、す、し、舟橋を、そり、浪津

の、城（シタ）、ほ、さ、た、ま、

大權現先陣の大將（アラカワセンジン）となり、三百餘萬箱
根山（ルムラ）の、り、た、ま、と、石田又兵

を、と、じ、長改（ナガハラフ）、又石田（ヨシタ）、と、秀吉
き、う、り、て、放、る、の、も、と、い、ま、た

あまうらまうにいじりあへずこそ法
軍観とすめく小田原一發向
たまか岩付の城をせし時嫡子有
大支事名本村常博もとくら又
大權取のあはれ多中勢大浦忠勝平岩
を計以就者を振舞を爲え忠も數千
猪岩付の城一發向すと改び
か多忠勝の大もとであ平岩親吉を
振え忠ハシラモとせし不日城下

とあやづ時城中うち和とて、敵を攻
こきとゆつて岩付の城をうけうる又
倉とみて其の城一發向じふくよし
さき石田三成作行す教官の勢とい
きわめて一きとて、事数十日なり
いともる城へて、ひりくたやとく
あめくす事ひにすはさき城中よ
うを多岐へりほくと和とて、三成抜功
のたまう事といつて多岐とのよし

いて、いそく城中より肉通の者りりゆ
日法軍勢一同、一であらわすみやに
は城をあらうる爲に長政り因により
せめしもこいへども三成をじて作竹
家放えり兵をつてももとす城中
ノリ。後とゆきり因によあてふせき
たる小長政率和をせめやがふこいへ
三成のさせもよろとあらせまゆへ
多政兵をひきとく付くしの教百

人主二成が以れりてわとやあらがゆ
から多政小畠ゑ三成のゆへ思の珠と
多政、主とくけらうれり秀吉奥
列はせじき、今はト陣とくらな
時ト、奥那、とくく今にきふの
放多政ト、命じて家東をひよ奥列
園那の田地と検知せし役十日の弓小
毛とくす、またあらわくも割法をも
ちゆ

内月朝日秀吉洛陽より西陣ありて援
立まじりと定する小笠政長は一通り
四才九年奥州高家が老臣の御某奥
郡の宰人松万人をもろきありて近那
とするおほ土民といけう（奥州大
石）もて立國の法將らきと創する
事ひこなすあたこまときて歎い萬
次と大将うて蒲生毛利彈穿成郷姫
尾高刀吉晴中村孫平治一氏前陣少て
大權現が岩毛次ノ浦陣をもろせたま
は先手井伊兵アカ浦あ政蒲生成郷
おどもにまみすんて大トナヒテ、長政
かじり一吉晴一氏ハシメで、もろ
でありて橋のうまで通うりといても
あく城門をとけりゆこの日のりも
事ひこなす法將のよと首とまじり

さること一千個たり主君の部ひらた
を改ざ陣りきてて切々南部り
を以となまくハ城をりけてくアれ
がとも改ざをゆーしを監督
山流ことく運もんも改め部を
さすをやめて本陣りつあを改め部を
いびきく今はトシルんこせに
あはれを改め大將の令をうけずして
ぬ部とゆうと事とこづいてを改め

あて途中ふく立部と譲ざじよの
ね秀次改め陣ありと改め上流にて立部
この幼ざることく南部のあとと行
文禄元年秀吉朝鮮を征伐せんとあ
陣と肥前のお護在りよりなす
時を改めじよ石田源雅が捕え成
増田右近の尉を威と渡海ヤリテ朝鮮
軍中の事とぞかし先もの法将
すくに朝鮮の都をせめやざり王子

とうりこにそと、いとし大内の軍勢
十万をせきたりく朝鮮をもよ見や
の法勢れ鮮の都より主陣のうち兵
糧とりにくかわへる（釜山浦の毛利
主の陣と引さる時）況惟敵和と
る、敵を攻三歳を感かねてゆけばほ
音とのげきへ秀吉もは歎く
たふありこゝどもわ壁いまくのが
らす大内の軍勢曰く「吾所」と

とも日本の兵はりて渤海をすこす
もあをる護脣アリおゆく

大權現アリびく利家心こねばりて秀吉
アリ（朝鮮よきりて征伐せんよ
たま、時遣人日本をうけさせいよくい
く由多海海阿蘭ハ國家のからず、
居きるなりと自御承とあしたま
てゆ日ハ國家の凶徳かうすおもんあ
らばすんで朝鮮となり事ひます

ありとぞひくひ山道と大りうるますり
リ一主毛毛のをなすこあを大り
いぢりと政が度を引きて林の難とくらん
ごーたよふと

大權院あゆく毛とくめたまひと政と宿
取つてアリし枚目の後薩摩の梅
小宮角左清の一揆をおつて肥後の園
ノリ乱入て熊本の城をさういふ
あを大小争ひて諸將とくわいめ評定

りりて、いづくと政の肥後の案内者をも先
きを引ひすとーととととととととととと
経けつへ先日長政がいそしむわしに目理ふ
ひくきり明日形段の玉ノリをき
一揆の虚實とうかがひるととととととと
方東を支幸ちを大將と
大權院のあ后を多忠勝と副ぬとて義
向すじあ将すくお馬のこきと
うして肥後より毛脚も奉てて

ていとくまでに梅水と津とからが故
ひでうすよゑえり
ひでうすよゑえり
あきあ將の軍りとやめも政
いごくら
金じて肥後事中の事とゆ波せ

じ
えんく
文祿四年、秀穂と、あ二儀のわ堵
ひりて甲斐の國とたまつを改天下の
せし
政勢とまくゆ一國と、幸をふりて
入別と、食色とたまつあ

まえぬ三年、秀吉を名すいはい一時

か改とて、おけりまよとこなんぢと
おののぬとて、こもと一國家を治
めんこそりき、おれにまれハ天下と
りむなんぢハ小國のまたり、是もあ
あれなり、一國大命たり、我と
事なきこと改治を、こまりて
波とおぎす、又秀吉のたまし、おまき
百里の役立人の年、おも人のまき
相もりて、國を平安す。

ようてのまゝのまゝ物とたまつゝ又老
政ニ三歲ことをりて始終朝鮮立
陣の軍勢をもておとへうす大
明勢我死するよりときうばくも、ゆく
えきりうりんあらう半領方の軍勢
化郷の鬼こなうバ一代のそらなり
あ人我死する事と我死する事と
ト仰く朝鮮へ渡海一もとも
さうてゆる所一百一事をうずんば

大禮現ト連れて枝下あきづく西
たり
二八月十八日秀吉薨御の後あんぬ前
のゑどりおもてく時り朝鮮より
書とれてつけていり鶴は二大明勢
二大さにたれりと大明勢敗れと日
本の軍勢遼海にてぬれを多く
二あん大りもひくおきに事
數月軍勢ことくくぬれをあん法
特小秀吉の遺言をいきにき物

のことをかづる詔勅ものくも絶ぜ
小うすあノも又上洛す数月の後石
田増田を率よき威勢をたてんこ
して大名とかづひ

大権現よりそしくからだねよ伏見謹勅
すと改奉長きと一小一て
大権現より属毛色よりてニまきの
誂りまく事あらずかきじくみし
うきりしまてと下さりぎくらき

本年の夏より下候ニまき
大権現よりそしくからだ改伏見と改
やも國の強勁をし事びしもろ
いくを改と申列小蟄居やめ候
毛一

大権現領しもと改ぬすて長政と申列
一ゆ一じよのり石田三成候わゆ
あくまでひくよ松京勝こ内通にて
會はすおゆく誂反ヤシ

同上年六月

大權現法將と引ひて京勝底代のあ
七月一日列小山に陣す時三歳
孫友のきこえりりとしを

大權現法將とめりあらゆてねくりく
のすいきの先奥列とくとくとく
三歳と孫やうは年二時長政
幸左幕下よりありゆきて始
タリハキ改へ先甲列よみて

右源院敵時中納言の中山道よりを發
とすらてあしりく孫とくとく
一幸左の我先陣よもんとくとくとく
幸安法將とくとく東海石より發
向すより

大權現よりキ改小下すとし御書よ
いと
書はる被さんかほの去共二月一日
と越ら及一隊數千人被討捕

五月廿二日、岐阜城をまわ
人も不淺。皆討捕ひ酒を貰ひ
魚、馬弓出馬。中納云若中山
石井助、もろらぬ御用通御見え
を教入し、度ち京大更多陽毫
幸。ほくに城と接し、又時
季崩一人も不淺。らば捕ひ酒を貰
ひ。一あは湯と与被非多き。はれ
御はまく財よりて達く

八月廿八日

家康判

あさの
清野洋右の内

清野洋右の内

七月廿五日、清國大井を陣て書
とよやく。と
大權現へ行きます。宿す所、旅居して
天下うとく幕下にます。

大權現長政とよみよしとたま、

事つづり。あけ一々政事に

大權現に因るのたまことがります。

もとてにのみくを改めと
きりまけとひるひをすて
與せよせたまふ、

四十年を改めをひゆくは

仕す時ト

右法院歎親也トなふ、と化す

うなり整年主壁にて五百石別
宅を替川内五千石の事也となふ
又城内の茶乞トおわく油茶とた

まりりぢりい宴アリゆき事望す

たびたり又

右法院歎親也改め事にあく波清
あくすくのなまのけりも毛毛

ふき事たうひな

四十五年四月卒と時六十年

五采法君功山道忠

童心もも満

天正四年江別坂本の城を誕生堂に

あるべくを約す

同十七年四月造立下り叙して

系文より解す

同十八年秀吉小国を収めのとき
を改小郡三千総頭とひきかえます

五月を改名勢と下知して岩付の城と
ぞしりこきまくわが身を多く多忠政
福久先づらく大手口とせんじゆう
橋の下おわくおたふ櫓中力に
ましまを改りにわくわとて、日向岩
付の城としきうち城中の兵舎とまつり
して四里よりゆき秀吉の軍の大功と感
じてあはとたまびのしげの刀脇指
をたまひあはとたまびの十五年忠政十六

某なり

（はる）

（やひ）

大將軍よりもは役大まりて廢棄（ひき）矣（ナシ）。
文永（エイウ）元年（カウジン）ある朝鮮（チヤン）征伐（セイハ）のあ間（イダ）の
名權屋（マニヤ）一陣（イチジン）をなす。聖年梅小肥
後（コトハ）入（スル）一揆（イチゲイ）とあらず時秀を委託
を大將（オウザン）におりしりじあら
きとも梅小すぐに謀ざら浦（シラカバ）のきこ
を行うれば軍りとやじまも時（ヒメ）
十八年（ハチサン）なり

同年朝鮮（チヤン）征伐（セイハ）の役こなるこの時伊達
政宗（マサムロ）を改（シテ）こもく（コモク）きゆ（キユウ）あつ（アツシ）ほき
をもがう（モガウ）わづなう（ワズナウ）てりく渡海（シラカバ）せん
べすあるをもひき（モヒキ）としもく（シモク）て因（オホ）
りやし政宗（マサムロ）をよそくたれをもく渡
海（シラカバ）一船（イチボウ）を全（ゼン）山海（サンカイ）を舍すをよおめ生
活（リビング）城（シロ）をキアリシくまつらうか藤
清正（セイジマサ）くすの城（シロ）をせめや（ヤシタ）
生獨（ソドク）もス（ス）おり

吾川沒落の後改ふことをも思ひて
四年朝鮮をとこひくをもゆめと
五年朝鮮をとこひくをもゆめと
五年大明の兵朝鮮とすと、時
をも又征伐の役して渡海しゐ生漏
とまむか友清ひい税強りりり法將
相圖とまよめて朝鮮とをひり敵
え元翼すんて忠清をりり
四年の秋夷者朝鮮へおこすと薄
の近代へおこす事とひりたま、

毛小り法將お儀へといく朝鮮の
無敗年城拂とまくと臂とを
まくりり毛とやめおりく人とろ
さん又ふく敵地へくとくば敵り
うりとまくりんこあのく擬議
もく而く、生漏のとくとく
一毛小りはす表多魚家を大將として
順天より都へびりて毛とすめ
おりつら毛利あえと太ねう

て黒田を改め、さへとまくにうひ
く敵地をあめうりて春湯より宿す蔚
山とさう事牧十里下りて大河のりて河
のもじてよりの兵士ととく而下り
大明の大軍をのりにおうひありて
りのえの兵士牧百人ところよ御
老陽よりうち時よりを去なびく小
毛利あらの完戸純前守大田毛彌守
同陣中よりを去ゆるの兵士

きし事をいりてすましら兵ともこ
して山かづれどいでも大明牧百の
軍兵たちひととげますゆ小まよだ
大り敵すをとくとくとくとくとくとく
山かづれどいす牧十里的大明百の
兵と肩をたゞ、敵とほく船と船
とく蔚山城中よりそよ事とひり大
明の兵前守とさきりてことくとく
りとくとくとくとくとくとくとくとく

石の底をうり馬ももえきりを
がこの時龜田大陽ち敵の將とまか
先小より大明の兵もづくありざる
まむ城中よソリキとひきり城
えか夜清兵もく門とさりらぬ大
明の兵急に城かとせあ辱すま長
完戸を向二丸を城としりと先と

十二月廿二日たり
因大ニ之日太西の將李如梅楊登等

早天より參とおして大手口に陣
そ已の列よ大明の諸將多合にて
おのれゆきとこむ附に夜清兵
枕張りけりて毛ときて、いつき
をぬり討殺せり我のめんぢりて
百強とのせと數日と強すて蔚山
いは城中力とひく登和小さき
たゞ珠中縦うりしばの板

ノリカニシテ城か出く死のノ
とさうりてその船としふ正月二日
ろまきうて日かの詔お殺万勝十蟹
のうに、大明の将揚高たかたかよりま
きのあとふせぐ事ことり、半はんして望
よみとらひく度たどりよへうんこす
大明の主事しゆじときて二月の兵を
ま殿まどをす月の朝あさりまきの兵こ
とく味あじりくらむ城中じゆう

又兵を牛て大明勢と數十里とひう
川首かわくびとさくの五千鰐いわしこと
をもがぬ生なま小こア清きよは税ぜい強きょう
かく

同年八月兵を嘉定けいじやうの後十日日ひ
の諸軍しょぐん勢せいを

同年冬石田増田いしをま
大槍おほやりをもじまく流黨りゅうとうをもじまく
家いえともふけんをすまたこか敵てき清きよを

黒田を改等せんへんを

おにぎりまきら

大権現おほぢげんの属しゆをせにあきとせんあれ
こいふまよ長なが二年ふたねあふゆあふゆ
聖年こうねの夏なつひづりて伏見大坂
おゆく三さんまいり龍りゆうとおこえん
うてせとのこきむじけす
まぐ敵國せきこくともあきずけのよ

大権現の年と月つき日ひ

同五年

大権現京勝近けいしやくちかのあ野の川かわ小山こやま
て後向ごむかあづまあづま小三歲こみや徳じゅくのき
らありうれば秋あき日ひ延のびたまひ
詔てしめ大だいねと軍ぐんとそりたまひ、委長まかな
すみ出だくいはよごの太名だな
まくあとしゆく御み令れいたまひ
まくあとしゆく御み令れいたまひ
まくあとしゆく御み令れいたまひ

とゆきじりすの處をす。

大權現、まこときこつめで、いよくち
きりとしもく、めたまふ時、まよひ
大權現のそなけたり。甚大なるものく
ほのをとす。ひくくせある
井伊が政が、多中勢が捕
忠信二人、詫ねの日付より

八月廿二日、詫ね本多川とさうりて
波阜の城をせめんとす。李長池曰

三毛瀬に薙政が新河内納川とさうりて
波阜の兵をたぐり、大勝利と
せり。あ将おのく首とさうる事
多殺人。翌日、波阜をさしりとさきを去
一人、瑞竜寺のうりあとせじ是ニ歲
が、あ人柳原、右溝つづまり、不なり
即時、壁柵をひき、手を城、
いふ大もの門か、おわく柳原校
百人を立てて、當時、おり相たる

し柳原ひきありまくをすかぬ
はも首とうりてまことがとこの時
敵とうりどま五百騎をもりあせ
原ノイテ

乙月十四日

大檜原木坂高山若御ありて四日一戰
とくらきのびの輝政をもと給
てあさ山の大軍西陣のうちより
合戦の竟中より無とおこな由

陣破後たゞ一とあ将ハ兩日うちおと
たゞしこあ將辟すとまちを半してあ言
山の藪よ陣とまち牛のけうりて國が
所一戰大小勝利とゆく敵とく敗走
大檜原大津の珠よ入津りてま下ここ
じくくぬ服す

大檜原割れと東船をば法圓トト
一たゞ小田池田輝政福島正則をも
びりをせ絶小よりて連署の判船

とくりし方の功業二人
なり右の軍功
ありか場びりて紀伊王とたまひ
日六年淡四位下小紋
似す
日十八年八月廿又日卒モ時三十九
歳
某は名無翁家玄

女子

越前守相忠昌玄子世

女子

源二位大納言義重之室
寛永十四年四月逝去

長男

但馬守

もろい名ハ岩松太兵衛作
幼少の時より秀吉の御子（ひこ）小竹より

てあをと

大棟況に暮とつこみたま、時暮石とあ
くして歎と

大棟況ちさかき事としもして成人の
ほほのくも巣がちんとちりと称す
萬一千余千石小姓組の
こちり末地三千石とくまより
萬一千余年大坂より京にうちり
くぬわのゆくわく二万石

をたまり
同十八年元事長紀川すく卒と子承
きあ

大棟況名巣と號府一

白瀧院殿こくらりたまひく紀伊國を

たまひてあ督とけく

同十九年江戸石垣の改善請と勅

同年九月大坂亂のとき名巣國を

うり十月一五中の兵万余強と行

ゆく後者へ移向へ今言ノ陣
をももと巣鷹源治磐田波守主徳也
そりてひこうに多上野久兵純と
りゆくよきとくかひ穢多う勝小
をじふ又舟とうづくまつ島
さう海さうりせあさんす時
城中さう仙波の町を築てての城中
いはみそらぬも日小仙波へり
りて首をきた事十総人をとる

山の山麓を一駆へこれと
吉浦院敵主功のすみやうある事と感
トたまひて役者へ呉服とくも
四年十月吉野の一揆と熊野の
凶賊こうしとひやく新主の城
とせめざんこす七歳が尼浜野村を
立つて人戸田六左衛門新主町中
の人衆とそりて戸田う毛櫛と地下
人二千総人とりゆく新主川と

西流を退けり毛一揆
等敗れて若岸とほひ吉野
郡一ヶ所か別毛脚とひく
このよりと往きすが嚴すからう
ち多云純一連一これど
大徳現内敵一おげやのく一正
純ねあり又紀州三國日高のあ那大
坂のりよし一から一揆をおこな
久留軍中の士卒ニ総二千人ども
ちほりて一揆とたゞけ 上皆小
ま一ヶ所か多云純一連一これど
か慶良の状あり
大坂和賀の役士卒とほりて大坂の
班子とくらべて久留主より又
一揆の終意を詳す
え和元年大坂再亂の時大坂と和
泉紀伊と大和の国人一金銀とほ
て一揆をおこすじ久留四月十

八月一ノ象列の佐野川一陣を佔
大野將軍亮が高地なり大野義
門中村を更しくて承りのりて
佐野ノリイキ一揆よりよけても敵
陣をもぐんこすもここりくし
タシバ中村とさりかず大野とさるけ
放ノ一揆退散す

同月廿九日大坂の近ノ四万総隊
大野義馬首と大将として津守誠元

守安ア大手を邑盤橋築國右溝門
副将として象列とあつて伊松陣を
この時大隈信重と陣とくる敵と三十
ヶ町と鹿児國右溝大手盤橋ハ一千
余弱八町あるよ陣とくろ櫻の井の里を設
かしてすみきづれと云ふ敵が敵に上田主
水魯田大隅ち一萬小縦をあらわす
多助助左衛安井長内岸丸三承渡壁
左衛作郎酒八木丸三承松宮勝

多勢十餘人麾いをとまつて相たゞ
八木村主東園右衛門をうちとみ園左
清門くづめ主水と達とあもと衣と
うるぬ八木の首といひうり多勢も
く矢をもうち毛田が向ひ殺十人
く娘妃とくにとまつて敗れす衣と
くゆす事ありそくて敗れす衣と
くゆす事ありそくて敗れす衣と
殺田甲首十二といひうますくら役者

を承伏えりけり右の首を放と
大體現役者と拂あはれて令紙のあ
つまよと山のおりて主銀功と
感し大手ひ出書と下さる役者も
沖馬と稱す主出書といふ
於ち主義及一銀融役多額財物
く東安江終仕合拂感思也

四月晦日拂黑布

淡野 沖馬ちどく

御手書

源氏坂相柳と付の郎 玄及一歌敵
牧多衣討捕と東山源氏を御方
被縛ゆく足利と此所も物と首筋
成御後玄蕃御内書はあ今と西役
者御前と之と並御感不鮮ひ絶く
猶右藩の實事無事とすと達ひと

三律

四月晦日

左馬上野从

板倉洋賀守

左多依渡守

膳室

正純

淡野左馬ち友

右酒院殿よりも書とたまり役者の

たまゝのも用ひたりとて書く

主度を甚め多以れ勵依く頑故
多がま祚め思食は跡可勵軍忠

事形需や

五月朔の御黒草

淡野経馬

大坂渡河の枝

大坂渡河の枝の時を最上

治す時

大坂渡河の枝

御財のりるるきの上を放上

水急田大隅多明助在淡安井森内

岩を落と不日よりのりせ登城

やめて有湯すと水急田よりはここ

を落とけらき金銀衣服と有終す

もり伏えり

兵院敵へ有湯す二条の城主のこ

日年七月後は候下に叙す
日年の多り御入り年勅と
大權現の出しあと嫁やめなまふ

日二年

大權現は不例の時を嚴峻廢し若
すら御玉堂の茶入とたまらぬ他えま
多政が御の實にて先年多ます

こうわたり

同五年紀伊國をりあ沛加増行り
て安藝一國をびしゆのうりと
大まくあ

同八年和泉肥後守忠清に因く江戸
は珠天守の土臺をきびく
寛永三年彷徨り候と

同九年六月三日卒と附一甲子七歲
法名洞雲宗仙

長重

台共清 素女正 混五位下

才三歳より

魚油院歎のほよりうちめり

うもむ

貞永二年十月一日素女正に任す

道五位下ノトノ叙ともものり

大權院の姫女松平とも萬允がじもと

よりてこきしゝ婦す

同五年奥列陣の時

魚油院歎とよひまつりて宇都宮文

ふりす

因六年

大權院の御命と傳く下野國真名

わくニ万石代地と能ぞ

因十年

魚油院歎以上海の時傳すと後拂

上院のたびごとに傳すと後拂

因十六年徳国土橋の石垣を立
端の善徳と云ひし

因年長政率すも東北のうち
真壁あく又万石領となふ
因十九年大久保お様守忠謙叛逆
の時長主は戸ノ門をも

大槍記

白山院殿の納命をかうすり和也
小一萬よ小田原にまわる 沢而

これと國義もくまよありそ
城を破却して善徳をつも

因年大坂陣より往く

えれえ年大坂事乱の時又日盲
をゑおきあるこ因へく軍功と云げ
きて盾級數百といひて人
三十餘年討死もか難免なすれ
ものり伏せやけ

因二年日光の山善徳と云ひ

たまりもは三度内善福を
つどし

同八年五月町に赤門因の地取
ときつく

同八年五月上野守改易ヤ
財納金より多く釐別す取交
の據とうけりてひもとつどし

同年右河の城よりあす

同年吉列管同の城となふ時

執事のもの

右法院殿の令とげて、
年勅仕事れあひ、事地と他國
あくたまりを拂かず、
翁の城とし、
こねりて真壁よ長せん
長ましくて、
墓のあり下なり、
城よ真壁をくじくたまり

うてわ増比の多くれをへと
ひけまがすみそらげひととくに
達す

右法院敵感義あくまく浦前へ
めあされ船きの浦相はあつる
寛永四年秋平下町ち華す時
糸津の城義をつもじ

因六年江戸浦城の毛五虎の
口立石垣の著信をびりて

の班善信とほせじ

因九年

右法院敵義津の時浦を相やくと
銀子と抱絆と

因年

わ軍都月充浦社奉の時今もとの清
敵の著信を行とし

因年長重病一か月水井日向
守上使すてもりても病を

文永四年九月二日卒と年四十九
ちえりき
鐵山道牛之馬す

女子

松原伯耆守長房妻

女子

姫義化守親良妻

女子

松平頼中ちの定綱妻

長綱

又一郎 母ハ松平主義允妻

寛永八年十二月二日没ス位下

叙 / 因而既よ絶ど

因十一年涉と源の時源ノのひ守
守るありて和田食の源門義を

絶し

同年駿府の源城よ五義を

同十三年、御内の丸北山普請

とつとし

同年、日光市御社參の供奉しあ
日光の御年詣よりたゞくちい

たくまつる

同年、御祥國の二使奉納の時
お別大儀おほぎをく、小と終食おひを
同十四年、よりおけ一社後とつし
同十七年、太坂の城造とつし

女子

女子

淡野、周囲守あさの、いもとのつみ

女子
女子

長治

又六郎

國惣くわもの

久保くわが長男ながえ

寛永七年正月に叙し因幡守

小作と

日九年正月に叙して佐伯守國
三者惠禱あ那又万石と領を

充服

三川口を岩松 安義守

久藏が嫡男

元和二年八月十二日紀列和亨山
の城ふく誕生母ハ

大權現のゆじとめ由

右法院殿拂上御の時充服幼少
て旁引もと御一げりうて御見

り拂上御脇拂衣服を着候
時一十九歲

寛永四年十一月小作と領をす

元服の時沖諱のえれ事成すと
松平の称号とたまりて従五位下に
叙し安藝守と仕を
同九年父長昌卒す
將軍家よりはういの使ありく
秀真の銀五千とたまりて殺代
の肩功を襲し和威のあつて
ある事とのてなほ日経をもつて
お督とたまりか

四十一年侍従小役（ひよ）従五位下小
叙と

四十一年二月うち八月（はちよ）従五位下小
御城殿とのお産とさしつけ財庫元
を詰めたりくまゆるもづる

都級宅（どのえま）奉相二郎

た湾使

支國同前

氏次

長た湾

支國尾列

某

凌野

甲州郡内にて二万石を領す

氏重

内賄 生國以前

至安三年氏重十一歳小て御へ越
升伊勢守が備主政大久保相模守忠
隣うりりきて

貞徳院敵を有してよりは小姓の沖
を云とけし

日五年景勝じりんの時

貞徳院殿御馬を宇都宮よりなま時
氏重仕をと贈よ西田治部より植ニ成上

方よりかく誂教の

（一）き、（一）

貞徳院殿宇都宮より東山道を上

方よりおりしきたまよ時氏重幼少

なりかゆく小姓よ（一）（一）（一）

使者と

貞徳院殿少てまじか大久保相模守

忠薄、れと被徴、——は直判の官書を
たまひかまな又使者と大坂小山とまう
足は直判の函書とたまひか

氏吉

元助

生國直判

未地二千石と有額

貢助 丸肉鷹羽二

貢助 丸肉鷹羽二

